

## ゴマサバ *Scomber australasicus*

日本にサバ類はゴマサバとマサバの2種が生息していますが、高知県ではゴマサバが多く、8～9割を占めます。ゴマサバは、大きくなると写真のように体の下側にゴマを振ったような黒い斑点があることから、この名がついています。また、マサバよりも体高が低いことから、「まるさば」とも呼ばれます。味は、マサバと比べて、季節を通じて変化が少なく、夏はゴマサバの方がおいしいといわれています。



土佐清水市の「土佐の清水さば」、室戸市の「室戸無神経サバ」はこの魚です。

### 生物特性

各年齢の尾叉長と体重は、1歳が30cm (300～400g)、2歳が33cm (400～500g)、3歳が35cm (500～700g)です(図1)。土佐清水では尾叉長46.2cm、体重1,593gという大きな個体が水揚げされたことがあります。マサバと比べると暖海性、沖合性が強いという特徴を持っています。

ゴマサバは主に30cm以上で成熟を開始し、伊豆諸島以南の太平洋～東シナ海の様々な場所で産卵します。本県では室戸岬周辺、足摺岬周辺が産卵場となっています。主な産卵期は2～4月で(図2)、3～4月に高知県沿岸の定置網ではサバ仔と呼ばれる尾叉長5～15cmの稚魚が見られます。ゴマサバは回遊魚で、多くは6～8月に北上します。北上したゴマサバは主に東北～常磐地方の沖合域で成長した後、翌年3～5月に高知県まで南下し、各地で漁獲されます。3歳以上の大型魚になると、一部は大きな移動を行わず、産卵場周辺に留まるようになります。

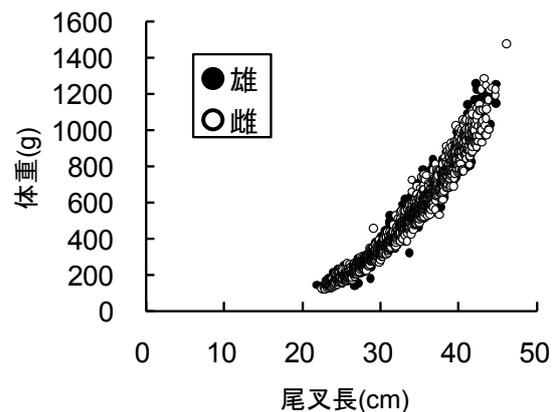


図1 高知県産ゴマサバの尾叉長と体重の関係(平成17～22年)。

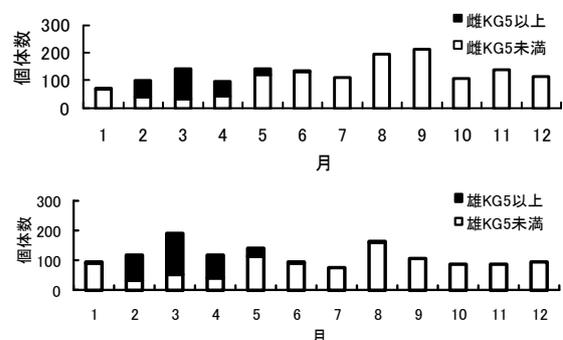


図2 高知県産ゴマサバの成熟係数(KG)の推移(平成17～22年)。

## 資源動向

高知県で漁獲されるゴマサバは主に太平洋系群に含まれ、一部東シナ海で生まれた群も来遊します。ゴマサバ太平洋系群の資源量は平成8年（1990年代後半）から平成15年（2003年）まで30万～40万トンと低水準で推移していましたが、平成16年（2004年）に卓越年級群が発生し、それ以降の資源量は減少傾向であるものの、50万～60万トンと高水準を維持しています。このことから、平成22年度（2010年）のゴマサバ太平洋系群の資源評価は、水準が「高位」、動向が「減少」傾向にあるとされています。

## 県内の漁獲動向

高知県内の漁獲量については、ゴマサバはマサバと一緒に「さば類」としてまとめられています。そのため、正確な量は把握できていませんが、ほとんどはゴマサバです（マサバの混獲率はマサバの項を参照してください）。高知県の最近10年間のさば類漁獲量は3,500～10,000トンの間で（図3）、平成19年に大きく減少しましたが、平成21年は約6,000トンに増加しています。

ゴマサバの漁獲はまき網、定置網、釣漁業（立縄、多鈎釣等）でほぼ全てを占め（図3）、漁法によって漁獲対象年齢が異なります。まき網は3～6月に主に北から南下回遊してきた1～2歳を漁獲します（図4上、図5）。定置網漁業は7・8月の北上群と5月に多く漁獲していますが（図4上）、その他の時期に様々な大きさで突発的に大きな入網があります。釣漁業は主に3歳以上の大型魚を対象とし（図5）、産卵期である2～4月と6月に漁獲量が増加します（図4下）。土佐清水の立縄漁は一年を通して月に50トン以上の漁獲があり、他の漁業が一時的に来遊してきた魚群を対象とするのに対して、漁場に留まっている魚を獲るのが特徴です。

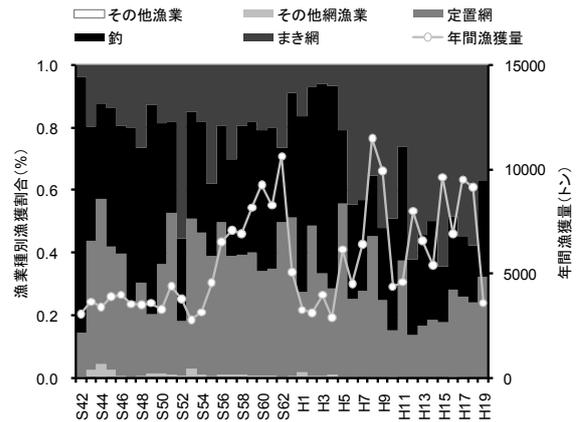


図3 高知県のさば類漁獲量と漁法別漁獲量割合の推移。

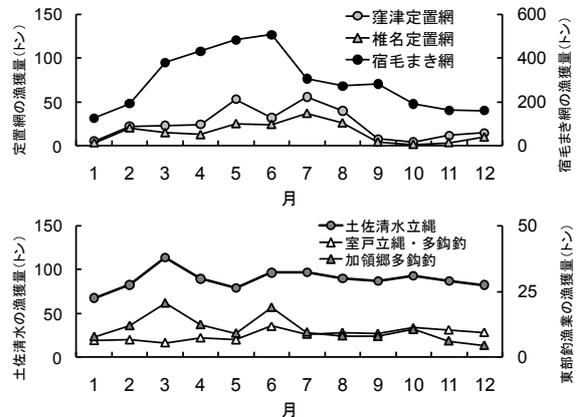


図4 各漁法における月別平均漁獲量の推移（平成12～21年）。

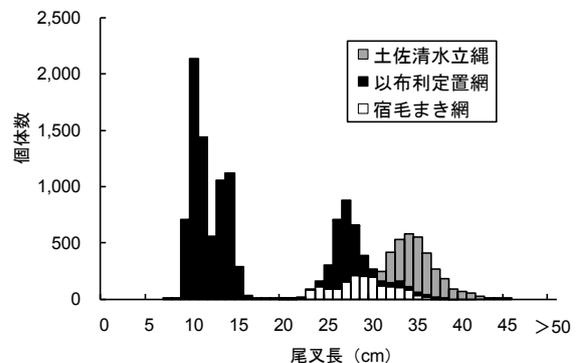


図5 各漁法で漁獲されたゴマサバの尾叉長。